ベスト・エッセイ2009 日本文藝家協会編

父娘（おやこ）の銀座

★編纂委員

高田宏／林真理子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

光村図書

娘の銀座

・エッセイ2009 日本文藝家協会編

★編纂委員

高田宏／林真理子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

江苏工业学院
藏书章

光村図書

ベスト・エッセイ2009
父娘(おやこ)の銀座
二〇〇九年六月二十日　第一刷発行

編　者――日本文藝家協会
発行者――常田　寛
発行所――光村図書出版株式会社
東京都品川区上大崎二-一九-九
郵便番号一四一-八六七五
電話〇三-三四九三-二一一一（代）
印刷所――株式会社加藤文明社
製本所――株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2009 Printed in Japan
ISBN978-4-89528-445-5　C0095

価格はカバーに表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は禁じられています。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ベスト・エッセイ２００９

父娘（おやこ）の銀座

目　次

あかるい日本　椎名誠　10
いぬの話　伊藤比呂美　15
うどん命　出久根達郎　24
ぼくの大切な友だち　山田太一　28
駅から歩く　荒川洋治　31
女だてらに　水村美苗　34
思い出の中のheavenly hill　リービ英雄　39
回天の一日　浅田次郎　44
父娘(おやこ)の銀座　増田みず子　48
頭の中に電気が点(とも)る　なだいなだ　54
かげろうさん　青山七恵　59
父子墓と没後の門人　岡野弘彦　63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

風に吹き抜けられる　古井由吉　68
乾いた目線で棄老照射（きろうしょうしゃ）　深沢七郎の「楢山節考」　池内紀　71
カササギの巣の下で　長田弘　76
明治天皇を食べようか　楊逸　81
記憶の中で育つ　鶴見俊輔　87
気難しい恋人との付き合い方　マーク・ピーターセン　90
子供たちの初々しい文字との出会い　小川洋子　95
黒飴の瞳　堀江敏幸　99
『源氏物語』はなぜ長い　清水義範　104
言葉の海へ　辺見じゅん　109
最後の文壇人　青山光二さんを悼む　大河内昭爾　113
戦場の生死　高井有一　116

高峰秀子の宝物　阿川弘之　121
逆立つ金魚　小池昌代　126
シオランさん　辺見庸　130
締め切りまで　谷川俊太郎　135
白い日　井上荒野　140
生への深い怖れ　秋山駿　143
レンタイのあいさつ　別役実　148
生命の灯が点るのも病院　黒井千次　153
「ええ、意味はありません」　香川照之　157
戦火に染まる空、幕電に光る空　高田宏　161
記憶　津島佑子　165
たとへていへば　大岡信　169

父のせつないたい焼き　吉本隆明　174
秋芳洞の闇　村田喜代子　177
翼を振ったカミカゼ　リンダ・ホーグランド　183
鉄棒の思い出　三木卓　188
出迎え三歩、見送り七歩　山折哲雄　193
くしゃみを続けながら　松山巖　196
研ぎすまされた文明批判　菅野昭正　201
匂い泥棒！　アーサー・ビナード　204
二度目の文学全集　瀬戸内寂聴　207
のどの笛　三浦哲郎　212
バスを待つ　四方田犬彦　215
一つの季節、終わる予感　ソルジェニーツィン氏を思う　五木寛之　219

鎮海の桜　加賀乙彦　223
美男　篠田桃紅　228
恩師の姿　新藤兼人　233
微妙な季節感　俳句における「秋」　鷹羽狩行　238
ＦＡＸ紙の裏に　新川和江　243
ブルートレイン五十年　関川夏央　248
〈山人〉という存在認識　馬場あき子　252
まとう美術品　林真理子　256
水火顚末　松浦寿輝　260
てんかいそうろう　戌井昭人　265
闇の役者たちと　野見山暁治　270
二日三日の盃　竹西寛子　275

川村二郎といふ男　丸谷才一　281
離島甲子園　村田兆治　285
理不尽の彼方　穂村弘　289
恋愛小説を待望して　田辺聖子　293
六十年目の太宰治　長部日出雄　298

装幀＝三村淳

装画＝大沢昌助

「人と影」一九八〇年作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ベスト・エッセイ２００９

父娘（おやこ）の銀座

あかるい日本

椎名誠

宇宙飛行士から聞いた話だが、夜間アジアの方向に入り、日本の上あたりにくると、夜なのに日本列島の形がわかるそうだ。

まわりの国々は夜の闇に沈んでいるのに、日本だけわかるというのは、それだけ日本列島中くまなく電気のあかりが点いているからである。

街灯や自動販売機は日本中に灯されているし、都市部は夜も眠らない。エネルギー自給率が先進国最下位の日本のこの傲岸不遜ともいうべきピカピカギラギラぶりは、各国からあつまってきた宇宙飛行士の中ではきわめて恥ずかしい風景であるらしい。

そのほかの国でもたとえばアメリカはシカゴとかニューヨークなど、そこがそれとわかるほど明るく見えるらしいが、それらは「点」としての明るさであり、国全体は黒い闇と

してひろがり、それらの大都市だけが文字通り都市の光が点在するかっこうになっているらしい。

その国の形がわかるくらい、つまりは国の形のイルミネーションになってしまっている、というのはたしかに「みっともない」だろう。そのほかの地域ではアジアのあたりが広範囲にぼんやり明るく見えるという。

「それはなんですか」

と聞いたら「山火事ですね」という答えだった。

日本の夜空がとりわけ明るいのにはもうひとつ理由があって「蛍光灯」が大好き、という国民性も関係しているらしい。ヨーロッパの国々は蛍光灯の光は工場などがつかう「ワーキングトーチ」といって安息を基本にする生活空間にそれをもってくることを嫌う傾向がある。

たしかにヨーロッパの国々は商店街などもいたずらにギラギラの照明看板などつけないし「昼よりも明るい」などといわれるいかにも異常なパチンコ屋の強烈発光の建物なども少ない。街路灯もオレンジ系のものが多く、ただ明るければいいだろうと、という発想はないようだ。

『夜は暗くてはいけないか』という本には刺激をうけた。題名どおり、夜は暗くなるから夜であり、暗くなるから人間の精神が保たれていく、という事実がある。

何度か北緯七十度から上のエリアを旅したことがあるが、北極圏などに入ると夏は一日中明るい。

「白夜」である。

日本にはない現象なのでこの言葉に憧れをいだく人もいるようだが、現実にそういうところを旅していると苦しいことのほうが多い。とくにぼくはカリブー猟の人々とツンドラに入っていく旅をしたのだが、氷のないツンドラは冬よりも楽かと思ったら反対で、雲のようにうずまいて襲ってくる蚊に悩まされ続けた。一日中人間のまわりにいるのである。

虫よけの網がついているテントがなかったら気が狂うところであった。さらに暗い夜がやってこないのでどうしても睡眠時間がすくなくなってくる。熟睡できない。そして常にまわりにいる蚊のために精神の休まる「いっとき」がない。

時期は少しズレたが冬の北極圏も旅したことがある。今度は「黒夜」だ。極寒が加わるから夏とは違った苦しみがあるが、乾燥して暖かい場所にいるときは「白夜」よりも「黒

夜」のほうが精神にここちよかった。

しかしそれも旅人としてせいぜい一カ月程度の体験であるから、その地に住み、毎年五カ月も「黒夜」に包まれる生活をしているネイティブには苦しいことである。

アラスカやカナダやロシアの北極圏でいま共通して問題になっているのは、若い人の自殺である。それが増えているのは、テレビやインターネットなどで世界のいま現在の情報が簡単に入り込んでくる時代、かれらは精神的な「閉塞感」に取り込まれてしまいやすいからしい。

行ってみるとわかるが、北極圏は広く、村は大きなところでせいぜい千五百人。娯楽的なものは何もなくスーパーに行くのがどうにか「現代」と触れる気分になれるところだ。よその街に出ていくにはもの凄い距離の移動と保障のない明日を覚悟しなければならない。「閉塞感」は「失望」につながり「厭世感」となる。狩猟民族だから銃がみぢかにある。それを手にとって引き金をひくのは案外たやすいのだ。

ひるがえって人為的に明るすぎる夜を作っている日本の文化も、精神的には非常に不健全な現象をおこしている可能性がある。

夜更けになったら危険なので街を歩けない、という状態のほうがむしろ自然なのかもし

れない。テレビは深夜は放映をやめていいのかもしれない。二十四時間なんでも売っている便利店「コンビニ」など、本当はなくてもいいのかもしれない。事実これまでわたしたちはかなり長い年月、そういうものがなしでも十分満足して生活してきているのである。

しいな・まこと（作家）「かまくら春秋」五月号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.